

平城京寺院出土の施釉瓦磚

奈文研が保管する寺院出土の施釉瓦磚について整理をおこなった。その成果を報告する。平城京の大寺院では施釉瓦磚が多く出土している。奈文研が保管する資料は相当量あるがこれまで全容は公表されていなかった。そこで、本稿では寺院別に出土資料の種類と数を示し、他機関が保管する資料については既発表の諸報告をもとに表に加算し、堂塔別に出土数を算出した(表43)¹⁾。出土品は図294に写真を示した。

興福寺 磚はいずれも緑釉の水波文磚である。中金堂院回廊東北隅で出土した磚は第308次調査の24点と、近年出土した第559次調査B区の1点(1)がある。これらは出土場所から中金堂所用の磚と考える。東金堂の磚は、修理工事で30点、防災工事で28点、近年の防災工事(第553次)で5点出土(2)した。

水波文磚には70度あるいは110度の夾角をもつ資料があり正五角形に復原できる。須弥壇の上に据えられた正五角形の框座上面に磚を使用したとの説がある²⁾。中金堂院出土の磚は厚さが1.5cmほどなのに対して、東金堂の磚は2.6~2.9cmと厚い。川原寺で出土した半肉彫り水波文磚の厚さは中金堂院と、南大門や北円堂の磚は東金堂と一致する。東金堂は中金堂の造営より遅れるが、磚の厚さの違いは時期差を示すのか、あるいは須弥壇の形状の違いに由来するのか、今後の検討課題としたい。

軒平瓦は興福寺出土と注記があるのみで、出土時期も出土地点も記載がない³⁾。瓦当下外区の珠文がのこるが、型式は不明である(3)。曲線顎Ⅱで顎面に緑釉がのこっている。胎土は砂粒を含まない精良なものである。

大安寺 昭和41年(1966)に大安寺の金堂と講堂の間を調査し、焼土層から多量の施釉瓦が發見された。このときは垂木先瓦28点(4・5)と同時に丸瓦や磚が出土した。その後、奈良市の調査により資料は増加し、金堂の北側から東側にかけて計17点の垂木先瓦が出土した。

大安寺の垂木先瓦を整理した中井公によれば、円形垂木先瓦は直径15.8~16.2cm、厚さ1.5cm、長方形垂木先瓦は、横13.3~13.4cmの大型品と横12.5~12.6cmの小型品があり、厚さにも差がある。このうち大型品は金堂、小型品は講堂所用とみている⁴⁾。

薬師寺 垂木先瓦は十字廊地区の土坑と包含層から計35点出土している(6)。緑釉を施した方形で、横は12.3cm、縦は15.7cmあり、大安寺のものよりやや小さい。表面側縁を面取りし、方形の釘孔をあける。近年の食堂の発掘調査でも2点出土した。その後、十字廊を全面発掘したが垂木先瓦は出土しなかった。したがって、方形垂木先瓦は食堂所用であろう。

東大寺 出土量は極めて少なく、出土地は上院地区に限られることから、東大寺前身寺院にともなう遺物と考えられる。仏餉屋下層、法華堂附近から出土した軒瓦と磚はいずれも三彩である。胎土は砂粒を含まず灰白色を呈する。軒丸瓦は6314E、軒平瓦は6667Dである。磚は平坦な表面に沈線で水波文を描く。これらの瓦磚は、阿弥陀堂宝殿所用、千手堂所用の説がある⁵⁾。

奈文研が昭和52年(1977)に転害門東の鼓阪幼稚園の敷地内を調査した際に緑釉の磚が1点出土した⁶⁾。細片だが上面と側面に釉がのこる(7)。緑釉単彩で濃淡が細かく斑状に広がる。所用建物は不明である。

法華寺 法華寺を中心とする左京二条二坊出土の施釉瓦磚については既に整理結果を公表した⁷⁾。法華寺の南に位置する阿弥陀浄土院(十坪)、十五坪は様相が異なるため、前稿と同様に法華寺旧境内とは分けて報告する。

法華寺旧境内では十五坪や東大寺上院地区と型式、釉色、胎土が一致する施釉瓦磚が少量出土するが、主体は胎土に少量の砂粒を含む二彩の直線文と緑釉の沈線水波文の磚である(8・9)。直線文磚は他の寺院では出土せず、左京一条三坊で出土例がある。法華寺と同様の水波文磚は阿弥陀浄土院からも出土している。これらの水波文磚を東大寺上院地区の水波文磚と比較すると、法華寺の表現は稚拙で単調なものとなっている。東大寺上院地区の寺院が天平年間、法華寺や阿弥陀浄土院の造営が天平勝宝年間から天平宝字年間初頭であるから、沈線による水波文、釉色や胎土の違いは時期差を示すものであろう。

十五坪の出土品はすべて三彩で東大寺上院地区と型式や胎土が一致する。しかも、その量は他の寺院と比して極めて多い。また、東大寺上院地区との違いは、軒瓦のほかに丸瓦、平瓦、熨斗、面戸、鬼瓦と各種の瓦がそろっており、施釉瓦葺きの建物の存在を示唆する。一方、東大寺上院地区で出土した水波文磚は十五坪では未出である。十五坪における三彩瓦を使用した建物の性格をあき

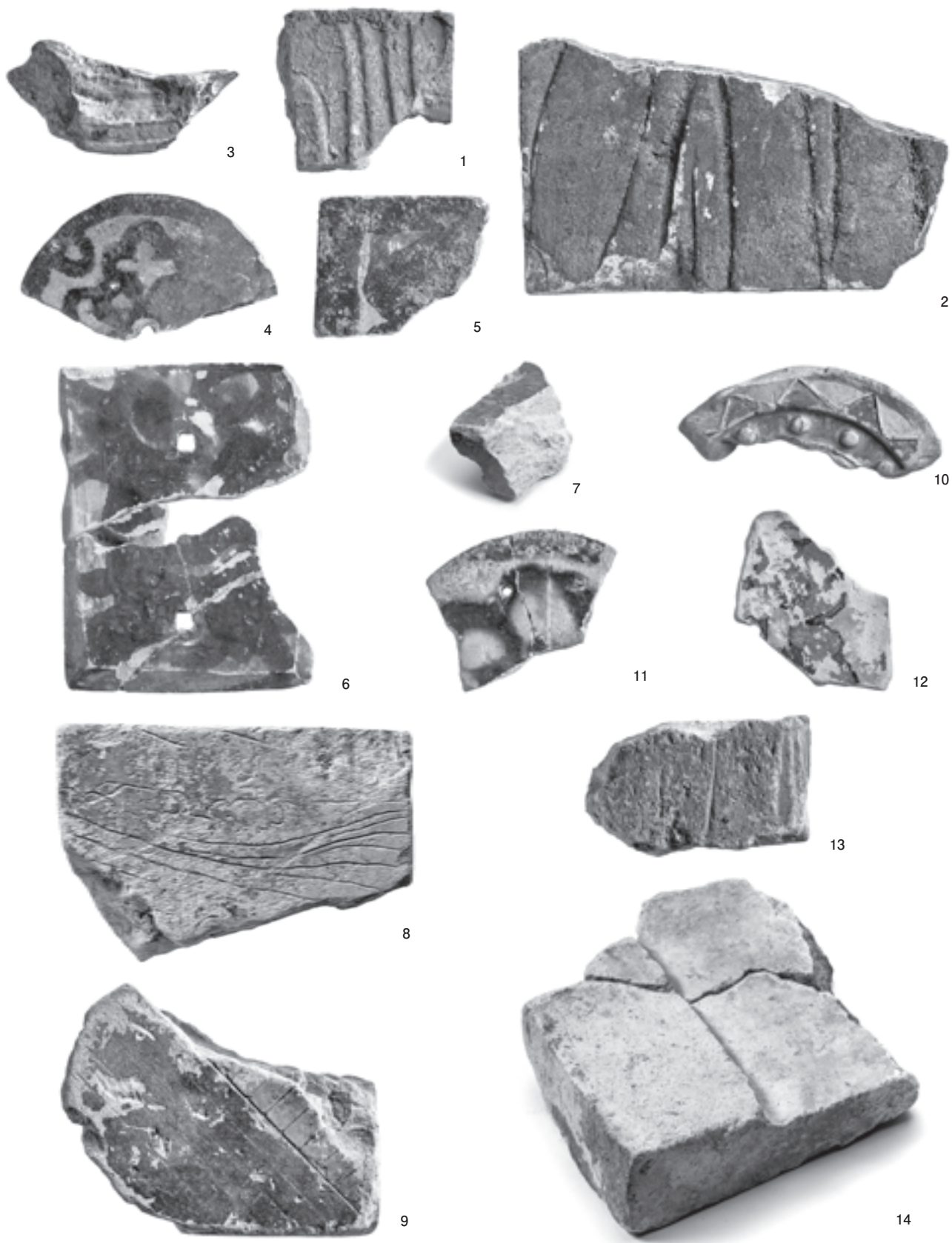


図294 各寺院出土の施釉瓦磚（縮尺不同）

表43 寺院出土施釉瓦磚の集計表

寺 院	堂 塔（調査回数・年度）	磚	垂木	軒丸	軒平	丸	平	面戸	熨斗	他	計	型式・備考
興福寺	中金堂院回廊東北部（308・559B次）	25										水波文磚
	東金堂（修理・防災・553次）	63										水波文磚
	南大門（458次）	1										水波文磚
	北円堂院（483次）	1										水波文磚
	不明				1							
計		90			1						91	
大安寺	金堂北側一帯	1	45			2						円形・方形
	南大門（市92次）		1									
	東面回廊（市128次）		1									
	東中房北列東側（市70次）		1									
	杉山瓦窯附近		7									
計		1	55			2					58	
薬師寺	十字廊（昭和52年度）		35									方形
	食堂西北（昭和49年度）	1										
	食堂（500次）		2									方形
計		1	37								38	
東大寺	仏餉屋下層	2			1							6667D・水波文磚
	法華堂附近	1		2								6314E・水波文磚
	転害門東（昭和51年度）	1										
計		4		2	1						7	
法華寺	法華寺旧境内	25			2	15	4	1	1			直線文・水波文磚
	阿弥陀浄土院（十坪）	6			2	10	7			1		水波文磚
	左京二条二坊十五坪			2	40	31	124	1	2	1		他は鬼瓦
計		31		2	44	56	135	2	3	2	275	
唐招提寺	講堂西側（防災）			1	18	18	41		6	5		
	戒壇院（昭和53年度）			1		1	1					
計				2	18	19	42		6	5	92	
西大寺	東塔	1	62		1							6732X
	西塔	2	30									
	東西塔の間		13							1		
	護国院東（防災1985）		1									
	四王堂南（防災1986Ⅷ）	3	1									
	本堂北側（防災1988Ⅰ）	7				1						
	食堂院（404・410・415次）	19	1	1								6133R・水波文磚
	薬師金堂西軒廊（505次）	8	1	2	2	1	1			10		6133R
	弥勒金堂東回廊（521次）	2					2					
	十一面堂院南（市25次）		2			2	2					
	右京一条三坊四坪（市20・33次）		2									
計		42	113	3	3	4	5			11	181	

らかにするのが今後の課題となろう。

唐招提寺 防災工事にともなう調査、解体修理にともなう調査、過去の採集で多くの施釉瓦磚が出土している。釉はすべて三彩だが、緑・褐・白の三色を波状に施文するところに特徴がある。また、軒平瓦の瓦当文様も独自で、同範瓦は他の寺院ではみられない。出土地点は講堂西側に集中しており、岡田雅彦はこの附近にあった影堂（開山堂）に施釉瓦を使用したと考えている⁸⁾。

奈文研が保管する施釉瓦は戒壇で出土した。軒丸瓦はわずかに外縁部分が残存し、鋸歯文に緑釉がのこる¹⁰⁾。3点の施釉瓦の胎土は防災工事で出土した施釉瓦と一致しており、平瓦の文様は波状文の可能性が高い⁹⁾。これらの施釉瓦は戒壇上の近世盛土から出土しており、戒壇所用ではなく、他所から混入したものであろう。

西大寺 これまで東・西塔、四王堂、本堂周辺、食堂院、薬師金堂および弥勒金堂の回廊を調査した。主体となるのは三彩の垂木先瓦で、円形と方形の2種類がある^{11・12)}。出土量から東西両塔の垂木先に施釉瓦を使用したことはあきらかである。垂木先瓦は薬師金堂の西軒廊、食堂院、十一面堂院南、右京一条三坊四坪でも少数出土しているが、所用建物の特定は難しい。

磚は緑釉単彩が主流だが褐釉単彩もみられる。磚の上面は平坦だが、下面には端面に平行して段を作るのが特徴である¹⁴⁾。釉は上面から端面、下面の段にまでおよぶ。平面形は方形がもっとも多いが、三角形、六角形（夾角120度）の例もある。半肉彫りの水波文磚が食堂院から1点出土しており、端部には段があるが、端部と反対の内面にはわずかに弧度があり施釉されている¹³⁾。

方形の磚は端部の厚さが5 cm前後、段の長さは8 cm強で一致する。しかし、六角形の磚と水波文磚は端部の厚さが6.2 cmとかなり厚い。磚の出土数は食堂院がもっとも多く、薬師金堂、四王堂も目立つ。本堂北側にも集中するが所用建物は不明である。磚は各院の主殿の須弥壇に使用したのだろう。

軒瓦は極めて少ないが、軒丸瓦6133R、軒平瓦6732Xが出土しており、非施釉の軒瓦と同じ大きさである。施釉軒瓦をどのように使用したのかは検討を要する。

寺院出土施釉瓦磚の特徴 磚と垂木先瓦の量が際立つ。

施釉磚は奈良時代を通じて各寺院で使用されている。金堂を中心とする須弥壇を荘厳するうえで欠かせない部

材であったのだろう。7世紀後半に出現する半肉彫りの水波文磚は興福寺に受け継がれるが、東大寺前身寺院、法華寺では沈線表現を採用する。西大寺は無文の磚が大半だが、半肉彫りの水波文磚もわずかにみられる。こうした水波文の違いは時期差によると考えられるが、表現する主題の違いに由来するのかもしれない。水波文磚がどのような風景を表現しようとしたのか、それは何にもとづくのか、その解明が待たれる。

垂木先瓦は使用する堂塔が各寺院で異なる。しかし、垂木先装飾は金銅製金具が第一で、施釉瓦は格下の部材と考えられる。大官大寺や興福寺、薬師寺の金堂は金銅製を使用していることから、当時、筆頭官寺の大安寺金堂も金銅製を使用したと考えたい。とすれば、大安寺の垂木先瓦は講堂所用となろう。また、垂木先瓦の花文は金銅製の文様を簡略化したものであろう。

左京二条二坊十五坪と東大寺上院地区の施釉瓦磚は、型式や胎土、釉色が一致することから、同じ工房で製作されたものであろう。軒平瓦6667型式は軒丸瓦6285型式とともに皇后宮職の瓦とされ、歌姫西瓦窯で生産されている。軒丸瓦6314E、施釉の軒平瓦6667Dも同窯産である。東大寺上院地区の阿弥陀堂や法華寺前身の十五坪は光明皇后との関係が深い。したがって、十五坪には光明皇后がかかわった仏教施設が存在した可能性が高いと考える。

（今井晃樹）

本稿はJSPS科研費JP15K03000の成果を含む。

註

- 1) 遺物の出典は堂塔名、調査年度や調査次数を示すにとり、概報、報告書等の詳細は省略する。
- 2) 大脇潔「寺院の御仏と荘厳」『はじまりの御仏たち』飛鳥資料館、2015。
- 3) 未報告資料。
- 4) 中井公「大安寺垂木先瓦考」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成23（2011）年度』、2014。
- 5) 高橋照彦「仏像荘厳としての緑釉水波文磚」『日本上代における仏像の荘厳 科研費研究成果報告書』2003、平松良雄「東大寺千手堂跡の古瓦」『南都仏教』92号、2008。
- 6) 未報告資料。
- 7) 今井晃樹「平城京左京二条二坊の施釉瓦磚 第279次他」『紀要 2018』。
- 8) 岡田雅彦「第3章 考察」『史跡唐招提寺旧境内 緊急防災施設工事事業に伴う発掘調査報告書』2017。
- 9) 防災工事出土瓦との照合に際しては、奈良県教育委員会の岡田雅彦氏、奈良県立橿原考古学研究所の小倉頌子氏のご協力を得た。